



去っていったものたちへ、去っていく自身へ

ゼロの殺処分

森 忠明（詩人／童話作家）

私の弟子たちのうち、いちばん礼儀正しかったのは酒鬼薔薇聖斗であり、いちばん無礼だったのは中田満帆である。二十歳以前だった神戸出身の両者に共通したのは、人間があまねく相続している二種の遺産、「呪い」と「ことほぎ」の比率が前者にうれしく傾きすぎていることであつた。私は「病人」以外の文学や、宿業と恥辱の単位を取っていない若者には興味がない。

十九歳の中田満帆が入門してきて十年、狂にして直ならぬ多形性倒錯的エクササイズのオンパレードに一番弟子たる園田英樹は、「あの男を切るべきです」と、ピカチュウが激怒放電するごとく言い放つたりした。中田満帆のマルチクリエーターぶりを面白がり、微笑をもつて評価したのは当時中学二年生の我が娘ぐらいなもの。

さらに無礼なのは当人だけでなく、彼の父君は『寺山修司選・森忠明ハイティーン詩集』をゴミに出してしまったのだそうである。それでもなお今日まで破門できなかった理由は、私が選んだこの詩集（初期のテロル詩というべきものは省いた）を読んでもらえば分かるかもしれない。彼は一時、マニ教という悪魔の苦汁（酒）に溺れ、飯場のメチャコワ法則に脅され、旅芝居の親方にヤキを入れられたり、どんな一流大学でも体得できないことを破局寸前まで味わうのだが、その命および敗者の気品を終始守護したのは、生まれつきの道化性と、これらの復讐天使代行詩群であつたはずだ。

大昔（一九六七年）、十九歳の森忠明は、「集団出世をしよう」とのたまう師に対し、「無意味を確認するためですね」などとはざいて白けさせ、近年は中田満帆に無名のエクスタシーを説いて失望させたけれど、「世界の再魔術化（ブラトン）」、つまりゼロの魅力回復を信じているらしい師と弟子の、無制約、無懲戒、純粹遊戯に、いささか生かされていることを白状する。

二〇一四年一月一三日 寝流庵にて



38w	ふるえ	港	失踪人	e・e・カミングス	JRA	点描	運転手求ム	うまくやりおおせればいい	交尾	業務スーパ一	箒	襟がゆれてる。	テールランプ
9	13	16	19	23	27	31	34	38	41	44	48	51	55

来歴	97
清掃人	94
猫	92
茎	89
裏口	86
火についての断章	83
空域	80
埋葬	77
死んだ馬にまたがって	74
壁	71
地域清掃	68
芝居	65
灰——映画「初恋・地獄篇」に寄せて	62
ヒッチ・ハイク	58



かつてのひところはたのしかったものだ

いまだっておそらく

やまなすびや

けむりきのこが

わたしのともだちに

ちがいない

あるいはやっては来ないみどりのからすのようなもの
いなくなったのはわたしのほうだ

どの路次をかよっていようが

はらからもなく

はらわただけが温い

ただれるようなうめきのうち

そこに起ってるしかないのだ

あこがれてたいずれも手にできない

たやすい職すらもたやすくかたづけられて

夢のうちっかわでけたたましい自動車どもが身を這うのを聴く

それはかつてすばらしかったはずのもののために奏でられる弔い唄

つまるところなにも起こりはしない

つかみとることやだきしめるなにもなく

ただ窓からみえるのはかがやかしい宿たち

Hotel TOM BOY や **Hotel juke box** そして **HOTEL QUEEN**

それらの燈しだけがほんものの、光りだ

だがわたしの手にできるのは38wの電球

そいつはたなぞにあって光りを失ってる

昏くなっていくちいさい室で

そいつを握りしめ

そいつが

ばちん

とくだけのまえに戸棚のなかへそっとしまった

こいつはいったいなんなんだ？



ふるえ

ふるえをとめてはいけない

とめては旅路がみえなくなるから

ほら

ぼくの疵口をごらんよ

これがたったひとつの標べなんだ

貨車を通りすぎ

厩の戸がひらく

馬を盗もう

そいつでどこまでもどこまでも

どこまでもいくんだ

そうつぶやきながらぼくは脱出の夢から醒める

そうしてトランクを掴んでは

からっぽのそいつを抱く

「天使はポケットになにも持っていない」

ダン・フアンテの物語はそう告げて

娼婦たちのコーラス・ラインに手をふった

でもいくら路をいったところで

出会えるものはもうなにもないんだ

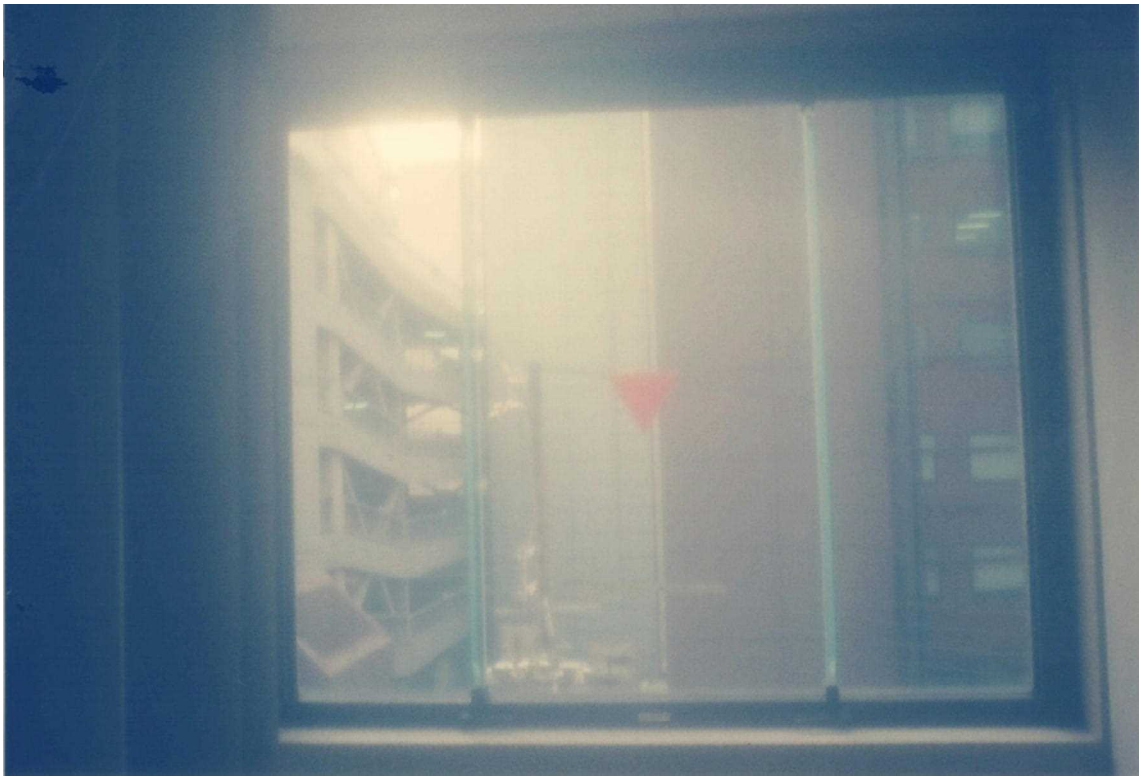
あの子のためならなんでもできるって、そうおもったころもあった

いまぼくにできるのはすべてをうっちゃらかしちゃって

ふるえとともに行路につくこと

あるいはハンプティ・ダンプティになって

塀のうえを踊りつくすのみ



港

日がなくなりつつある

おれの足に生えた影のさきつちよ

知らない男らが倉庫のあたりで

ゲームをしてた

港がすぐそこまで近づく

聞きとれない声でなにごとかをいってて

やがて遊びつかれたかっこうの男らは作業着に抱かれて

そのなかへ飛びこんでった

たくさんの

小銭と

札が

まきちらされ

なにかしら病気か

風船みたいに膨らんだ鳥どもがまっすぐに赤いクレーンを過ぐ

おれもそこにむかって飛びだしてしまいたい
そのとき

外国船がだだをこねはじめた

——もうこつから動きたくないんだ

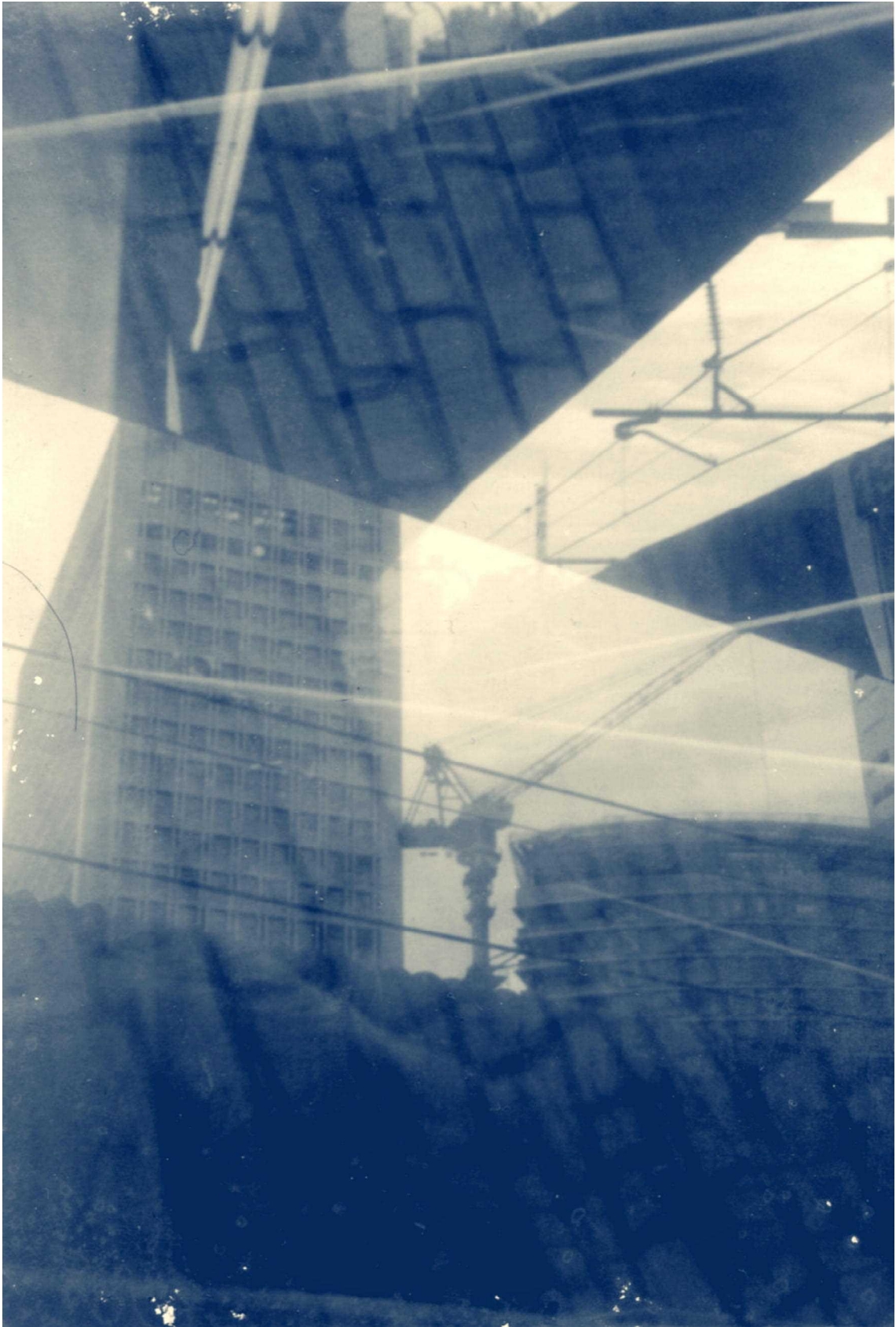
——ずっとここで眠らせておくれよ

夜はかれを絵葉書に包みこみ

しかしながい路線のずっとさきのほうで

かぜにまきこまれてかれはすぐ

みえなくなってしまうた



失踪人

どうしてだれもドアをあけないのだろうかとおもう
ひなびたアパートメントで寝てるのは？

あるとき

音があつた

睡りから醒め

窓が薄緑になつてるとき

おもてはいつも静かだ

愉しみでいっぱいというのにどうしておれは噤むのか

歩くひとびとは搾りたての乳のような腥さ

やぶれはてはたちどまり

唇ちのなかにあるのは

あらゆるものを見喪つて

好機の見いだせないとき啜るジンジャーエールの味

ひとたびそれをおもつてはあまり願いは抱けない

納屋を燃やせ

うちなる納屋を燃やせ

おまえ燃やしてしまうがいい

それならずと草のように生きられる

はやい話し夢の尽きたあとを追いかけて

走っていくのがふさわしいのか

このまえどこかの裏庭を濡らした雨はかわいかったよ

いずれにせよ

いかなくてもならない

求めるものを決して数えないで

求めるときには時計はずして

自身をただ解きほぐすこと

多くのものやひとが散っていく

たったひとりと天界とをむすびつけようとしてだ

それでも留まってるのはいや

ながく滞在できないのを知ってる

眼のまえでひとりの女が手袋を投げ棄ててった

できるならかの女にとってふさわしいやつになりたい

列車は市外へとまっしぐら

隣にはオースターのインタビューを読みながら

ふるい帽子についておもう男

かれが降りていったのは北口で

だからこっちは南口

降りようとしたら

気づいたよ

これがもう終の行路だってこと

鉢植えがいらなくなったのを

かの女わかつてる

きつと抛りだして

でも気にはとめない

だってしあわせなんだもの

知らない土地で身をよこたえるように

知らない土地で半分その身を埋めるみたいに



e・e・カミングス

父方の祖父と会ったのは3度だけ

いちばんめは産まれてすぐ

つぎは小学生

そしておしまいは20歳の夏

かれは酒乱だった

わたしも酔って父を撲りつけ

父はいったもの——おれの親父にそっくりだ！

夜のハイウェイを山奥へといき

さみしい田舎にきた

なにもないところで朝を迎えた

祖父の死体は暑さからか

大口をひらき

薄目をあけていたっけ

わたしはロートレアモンとニーチェを読み

眼のまえで女の子の絵がでかかと載ったライトノベルを読むでふの従兄を軽蔑してた

しかし、それだっていまにすればどんぐりの背較べだ

どちらにしたって誉められたものじゃない

——息子さん、よく本を読むのね、うちのも読書が好きで。

伯母がいつて母が返した

——ええ、じぶんでも書いてるんです。

わたしの書いたものに母が興味を示したことなど1度もなかった
やがて出棺のときがきた

祖父の製材所はもうなくなって

かれの後妻は人形みたいにうごかず

なにも話さない

表情もなく

パイプ椅子に坐ってた

祖父は昔し祖母を追いだした

わたしが9つのときにかの女は死んだ

葬式で泣いたのはあれがはじめてでおしまい

腹違いの伯父がきれいな妻と

そろいの服を着たふたりの娘とともにいた

われわれのなかでいちばん清潔で幸福そうにみえた

昔しかれにもらったプラモデルをおもいだし

それからまたうつくしいかれの妻をみた

店の1軒もない通りを歩き

やがて燃え尽きる祖父の

終の烟をコンクリートの長椅子から眺めた

ひとりだけ煙突のみえるそとにいたんだ

烟が午のなかに失せていくにまかせて

犯罪小説をわたしは考えながら

蓮の花托をみた

無数の眼が

わたしをみてた

夜になってまたもハイウェイを走った

父と母たちは悶着をやりあい

べつの道をいった

途上、コンビニエンス・ストアに寄った

コーヒーを買ってでていこうとしたとき、店員の女たちがいっせいに笑いだした

わたしはいった——つまりあんたらはカミングスがお好きなわけですね！

またも車に乗って

父の憤慨に身をまかせた

母と姉妹がどうなったのかは知らない

ただわたしはカミングスが好きでもきらいでもなかった。



老夫どもは敗れもののおだをあげて去った

おれには賭すものがない

わるいが競馬をやらないんだ

おまけに知りもしない

6月——第2番めの土曜日

午後5時29分と3ハロン

降らしぞこないの曇天も失われ

現れてくるのはいっぴきの孤立者

とてもおれにそっくりだった

うら若いというのに

かれは更生センターへひけていく

そいつを眺め

ひとたび眼を臥せ

やがてふたたびあげる

もうみえなくなっていた

おれはかれでなかったから
草色したポルノ屋へとおもむく
かれもやはりおれでなかったからだ

馬の眼の男がひとりきり

そのころあい

女たちもろとも

ポルノ本をかつ浚おうと

したため

そのそでを店員は掴み

そのままひき千切ってしまった

おれはその布切れの青

そのものの眼をして

女の子たちを探る

あれはまるで襞のような笑み

それはまるで縫いめのような笑み

これはまるで濡れたスカートのひらめきそのものの笑みだ

おっと——勃ってきやがったぜ

もう少し待っている！

この笑みを片手

支払いへむかいはじめたとき

小男たちがいつせいに鞭をふって

半馬身の差に男はおもてへ逃れ

駅へと渡る横断歩道の半ば

そこに斃れた

昔のように雨は降らないから

硬い靴底の粒のうち

なにもかも消され

もうなにも

わからないのだ

やつはおれだったろうか？

ともかく、

安らかなれ、

だ。



かつてあったらしいもろもろを求めてながら
点をたどったところで

なにもない

わたしはあたらしい雨を待つ

やもめ暮らしの男だ

ひと昔か

それよりもっとまえのことにあたまのながが充たされ

とてもじゃないがそいつは追いだせない

みじめったらしく

とっても醜いやつ

過ぎ去ってもはや掴まえることもできない過古と終わりに話す

だれかがわたしを憶えてるかも知れない

でもそれは気休め

たしかに13年まえの4月

まだ15歳

駅ビルでわたしはかの女から声をかけられた

あかるい声と

とても素敵な笑みで

でもそのときおもうままに応えられなかったみじめなやつだ

すごくうれしくて

すごくこわくなって

逃げだしてしまった

かつてあんなにも好きだったのにもかかわらず

きょうもあたらしい雨はやってこなかった

かの女への手紙をいくら書きあげても

届けるあてはない

通りを警笛が鳴りやまず

5月の窓を閉じてわたしは横たわる

かの女の20歳すらも知らず

そんなことがとつてもくやしい

どうしてなのか



運転手求ム

二十五番めの、

晩夏

浮浪者収容所より追い放たれたぼくは軽四へ載りこみ
ほかの三人とともにしてどやの群れをぬけた

中部はどこか——どこだっていいところへと運ばれる
なじみとなった失意の手たち

足たちとともに降りれば

こわおもての男らだ

やつらはぼくらに千円いちまいきりを配っている

——きようとあしたの飯代だ

——まずは解体手元をやってもらおう

——おまえたち、やる気はたしかか！

さっさとぼくは新聞を買って求人欄をみる

「話しがちがうじゃないか」

「まったくだ」

望みはどの広告にもなし

四つともがちがうやりくちでふけた

「きみはどこにむかうの？」

そのとき、アーニイ・ヘミングウェイによって書かれたトム青年、
かれがぼくのうちに手をふったから

「あなたの反対側ですよ！」になった

切符をちよるまかしてもとの町へもどる

またつぎの飯場にそなえて

七百円の高級ホテルに泊まった

滅の不滅性——そのうちがわでぼくの無能が暴かれるまでの、

わずかな飯と室と水があればいいのだから

そのいっぽうもの乞いたちはみずからのかげで時を測る

しかしだ、

世の光り、

そのたもとで

かげというのは

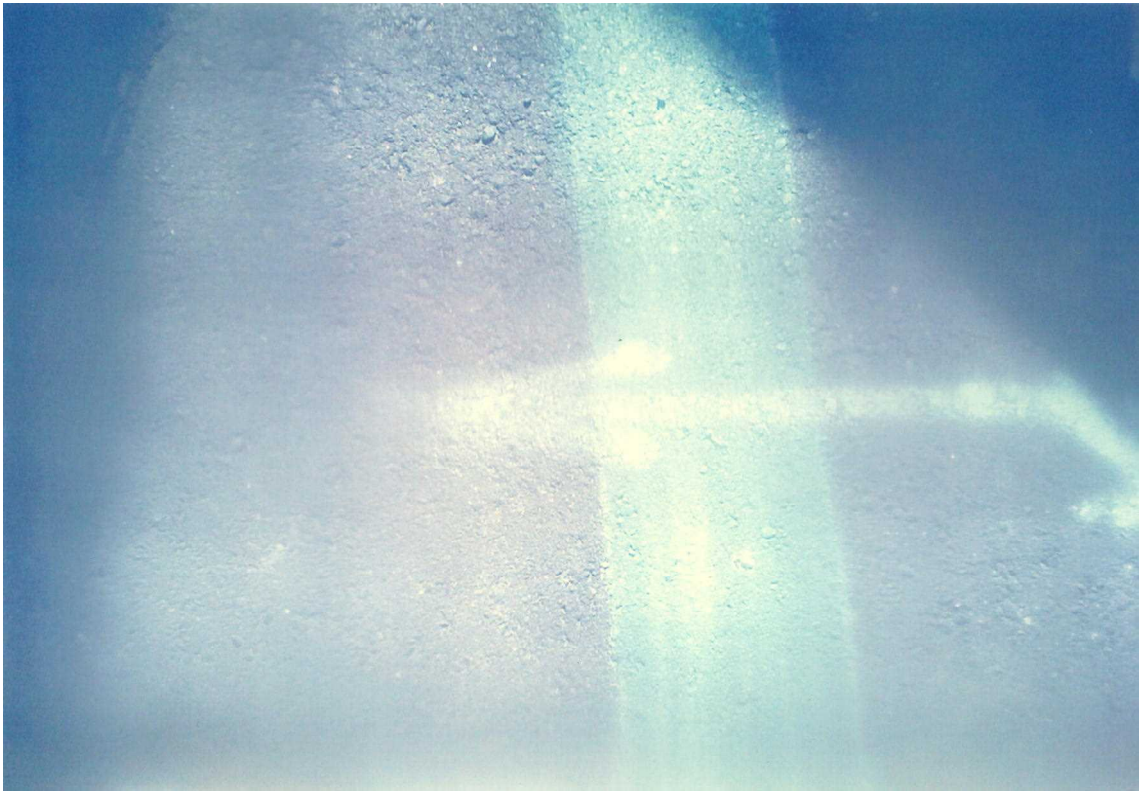
そこらじゅうにあって

ひとのかたちをしているけれど

そいつがほんとうにひとなのかはいまだ

判然としない

だれが審判などかってでるものか！



うまくやりおおせればいい

岐路を過ぎても

いまだ運べないのは自身そのもの

通りいっぱいに救急車が疾駆し、

雨曝しになった自転車を過ぎる

ぼくのまわりを鳶が鳴き、

火がまわる

もはやここもふさわしいところではないと気づかされ

郷愁の引力にまたしても身を伏せた

かつてのかわいい女の子たち

もうだれかの妻で

だれかの母

それでもぼくはこう考える

もしも瞞したくなったら

声をかけてくれ

もしも苛立ちにたえきれなければ

唾を吐きかけてもいい

奪いたくなればなまえを呼んで欲しいと

うまくやりおおせればいい

うまくやりおおせればいいけれど

どうか憶えてほしい

こんな三流の気狂いのことを



交尾

いくらそいつをやったところでゼロに過ぎない——ある詩人が咆えた
おれはピンクちらしを眺めながらそれをおもい浮かべ
おもい浮かべることは一瞬の死に過ぎないとかぼやく
かぼやくのは断定のためか、仮定のためか
ともかくおれには女がいたためしもないければ
やったこともない

画像のうちの、かわいい女たち

あるいはとまったまんまで息をする裸婦像たち

すべてがなにかと交わりまくって

おれは高所恐怖に襲われる

やがてありもしないかの女らが

このおれを救いだしてくれるのをおもいながら

それでも深夜の簡易食堂のように交尾するものたちが

通りをはしやぎまわっては去っていく

ラブホテルに囲まれたアパートメントの一室

言語はしたたかな企てをもつてして

おれにも交尾を与えてくれる

きのうは黒髪 of 殺人者と一発やって

おとついはスーパーマーケットの便所で一発

そして今夜は黒衣の少女と三発やってやるつもり

救いはみな自身のつくりだすところに見いだすしかない

逆さになった羽虫にみせておれたちは寢床でからみつ

なにもないところからなにもないところへと帰っていくための儀式

いくらやったところでゼロに過ぎないと詩人がおれにむかって咆えた

うちなる恋人よ

ゼロをもつと与えあおう

かの女は連絡なしに現れて

おれの首に喰らいつく

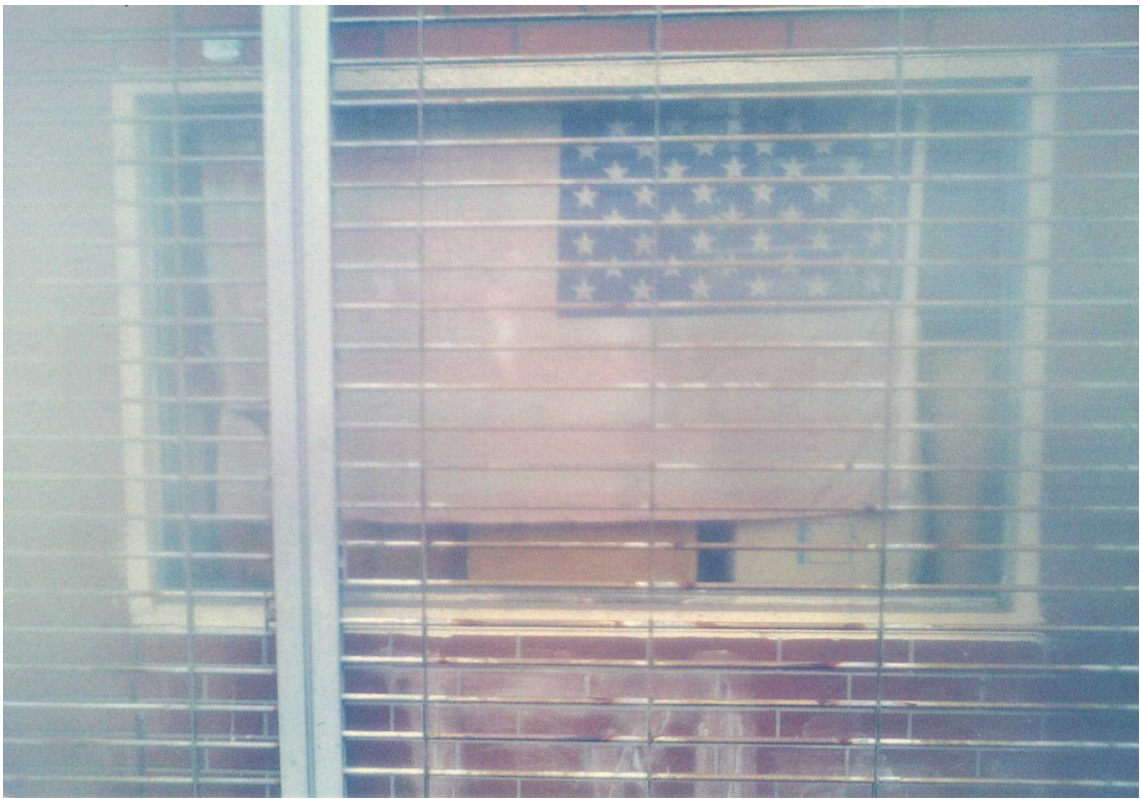
それでもやるより

そのまえのほうがずっと愉しい

すべてが無に過ぎないとしても

おそらくおれのゼロはほかのなにかを孕んでいるにちがいない

じゃあな



業務スーパー

おれはスーパー――

マーケットのなかで死にかかっている

天秤のうえの肉片のように

さえないつらとなまぐさい息を吐いて

洗濯機のうちでまわる汚水と汚れもののような

両の眼

おれは老人を越え

インド女たちを越え

シヨートパスタ、豆腐、納豆、ベーコン、そのほかもろもろを仕込んで

列にならぶ

行列はまるで死

そのものだ

太った聖者たちが片目を手で覆い、

世界をひとつにしようと企む

かごの中身はといえば冷凍の鰯

おれはスーパーマーケットのなかで死にかかっている

なぜならジッパーがぁいている

（これはほんの風孔だ）とおれ、おもう

綿のはみでたぬいぐるみをみせて

おれはうっとり勘定をすませ

感情を殺処分した

いまや、とおもう

スーパー、

マーケットのなかで死にかかつてはいない

閉店だと蛍の光りが告げる

いっぴきの犬が吠え

一羽のからすが跳ね

数千台の宗教が御託をならべ始めたとき

おれはジッパーを閉じてようやく丘のアパートメントへ帰る
空想のかわいい娘たちを連れてだ

あらゆる好機は過ぎ去っていま

13 本めのストーリーにとりかかる

そのなかでおれはまたしても死にかけだ

（呼びとめてくれ）とおれはおもう。

なにもかもがでたらめさ。

おれのみに、

おれのみに幸あれ、だ。



あるとき門が碎け

そこがひらけてしまったから

しかたなく母屋からでてみれば

納屋が陽のうちに眠り

燃えながら建つ

光りは13秒の間隔で

眼を撃ち

影を走らせ

土壁を這っているいっぽんの櫓へと寄り添う

それでもふいに暗くなる納屋のまえ

凭れかかる箒が呼びかける

きつく

それからあわく

きつく

それからあまく

透きとおった茎になって追いかけて来る

それらすべてはくたびれた箒がかれを夢見るあいまのできごとに過ぎない
あるとき男が倒れ

そこへばらけてしまったから

しかたなく拾いあつめてみれば

嘶きをあげて襲いかかり

おれを攫みあげると

そのまま

背に乗せて走る

納屋はもう見えなくなった

町がふりかざされ

斧みたいな丘の麓から

せりあがる波は高い

だれかが叫ぶのを聞く

野生の馬が丘を越えてくみたいに日々は過ぎ去る！

そのとき燃えあがる街路燈を男が薙ぎ倒してしまった

噎れた警笛どもが追いかけて来たっておそらくおれは踊るだけ

でもすべてはくたびれた箒がおれを夢見るあいまのできごとに過ぎない



襟がゆれてる。

for Hideki Yoshimura from "bloodthirsty butchers"

襟を掴みながら手も足もそして顔も

凍傷になりかけてた

おなじ道をいきつ戻りつ

たぶん躰を温めようとしたんだとおもう

公園のベンチにたどり着くと

ヘルメットをしたまんま横になった

しばらくすると関節のすべてがぎしぎしと音を発て

凍死の危機を報せてきた

だから起きあがって

また歩きだした

眼を伏せ

狙いを定め

北インターへと

そこにはかつてのアルバイト先があった

鎖を越えて駐輪場まで来ると

塵箱があった

そいつをあけて

ビニール袋をひっぱりあげる

そしてそいつを公園まで運んだ

なかみは野菜の切り屑と生肉の切り屑

必死に唇ちに押し込みながら

おもったものだ

どこにも帰れないと

まだ若い顔でうつろで——泣くようにして——喰った

そして袋をもとのところへもどし

また歩きだした

あてどなく

ガソリンも乏しいなかで

やがて朝は来た

なんとかかなりそうとおもいながら

襟を掴んで凍った手で泳えた

もうじきなにもものかが連れ去ってくるように感じながら

光りがかれをつつみ

ジヨルノの坐席が少しづつ温かくなっていくのがわかった
みんなはどうしてるだろうか——かれはおもいだした
会いたいひとのいるのを

しかしいまではすり切れた23歳の夢でしかない

けっきょくは国道176号を宝塚のほうへむけて走り
白旗みたく襟をゆらして

字地の実家へと

山を登った。



テールランプ

まだ朝は来ない

眠りについた仔牛たちをおもい浮かべてたら

幼年期が眼を醒まそうとする

明けるまえの通りを突っ切るやつら

ライトがまだ温かい光彩を放ち

ゆっくりと

ゆっくり

ゆさぶり起そうとしてるなかで

ひとり

過古を混ぜっ返してる

でもそいつは郷愁なんかじゃなかった

在庫整理に過ぎない

おもいだしたいのはおもいだせず

忘れ去りたいのは忘れられず

いつだったかあの子が訊く

だれがいったいだれのために祈るのって
でもおれは祈らない

ふと信じたい気分るとき

台所のナイフをおもって押しとどめる

死ににいくようなものなんだ

やめておけ

やるべきは枯れた花を抱きしめること

やるべきは涸れた詩神とやらを葬ってしまうこと

二十四時間営業の墓場で

さあ石のなかを泳げ

泳ぐがいい

いずれやってくるもののためにできる、たったひとつのやり方

もう溶けてしまったアイスクリームや

なにも映らない受像機

盗まれた傘やなんかにかこまれて

すっかり息ができなくなっても

もう大丈夫

テールランプは三階の窓を過ぎてったし

きみはおれのことなんかもうすっかり忘れているのだから

どうかそのままでもいい



ヒツチ・ハイク

死んだはずの夢が

夜半に帰ってくることもある

たとえば眠れないときのことだ

おれは14で

世界の終末はすぐそこだった

でも来やしなかったんだ

夕方家に帰ってくると

おれのものが――絵も画材もなにもかもが裏庭にちらばってた

そんなことを頼んだこともないのにだ

父はそういったやりくちが好きだったし

母はなにもいわないのがいつもだった

おれは散らばったまんが雑誌のうえで踊った

やけくそになってすべてを忘れようとしてたのに

なにひとつ忘れられないのはどうしたことだろうか

「早く、片づけな」

母がそういった

だれもかばってはくれなかった
でもいつものことだった

子供たちのなかで男はおれだけ

きらわれ役はそれで足りてたから

ともかく親父のコンピュータを破壊した

配線をちょんぎり

基盤に唾を吐きかけた

そして公園に逃れた

でも親父はそこに駆け込んだ

おれはあわてて逃れ

町へでると一夜を明かして

ヒッチ・ハイクをはじめたっけ

乗せる気のない運転手が「がんばれよ」ってほざいた

トラツクのじいさんは優しくて

目的までまっすぐ

でもおれは祖父母の住所を知らなかった

かれらが調べてくれて

おれはようやく居場所をみつけた

それでもすぐに帰され

おれはまたしても父に撲られたものだ

あるときそいつがいった

「なかなかいい絵じゃないか」

「でもこれは習作だよ」

「とにかくこれはいい絵だ」

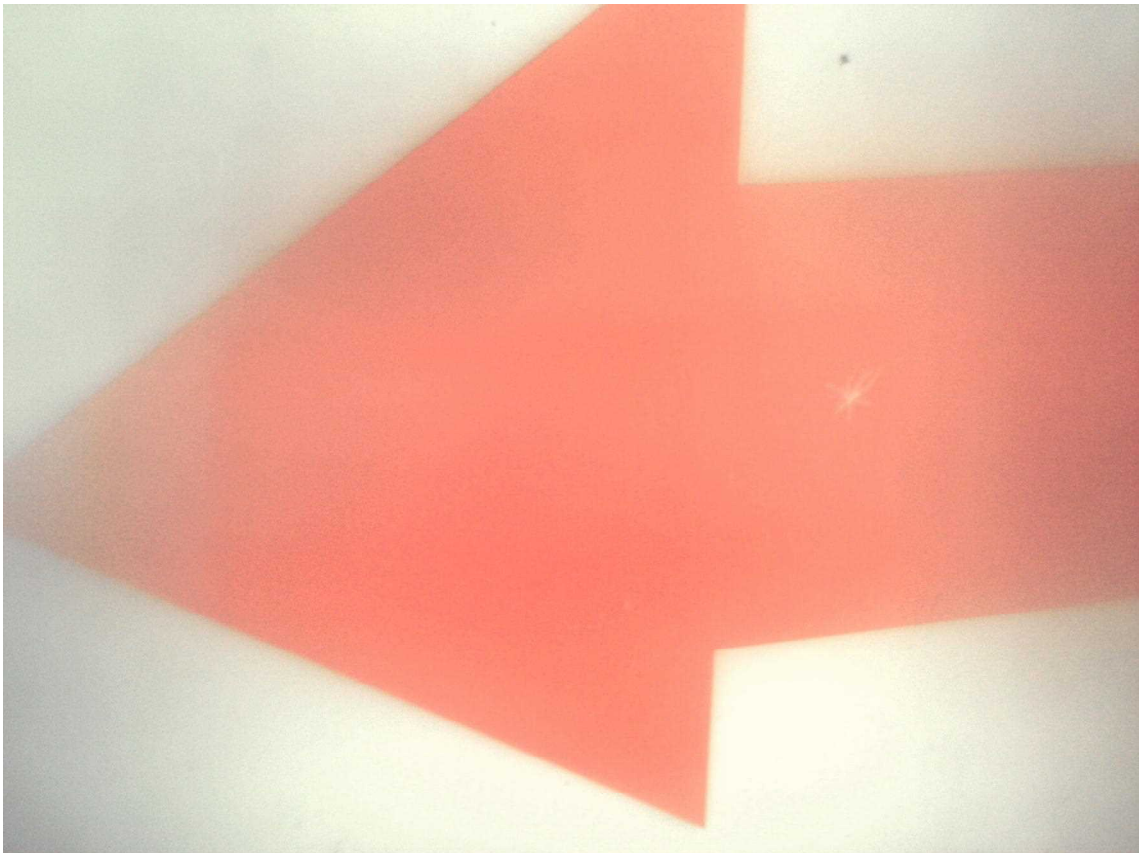
「じゃあ、あげるよ」

たぶんそれは顔を手で蔽う男の絵だったとおもう

おれの気分そのものだったが父にはただの絵で

週末にはまた長い日曜大工と折檻が待ってた

友だちなんかいやしない



灰——映画「初恋・地獄篇」に寄せて

昔の人が愛を炎に例えたのは正しい。

愛は炎と同じように山ほどの灰を残すだけだからね——エドヴァルド・ムンク

果たせなかったものたちにとって

ふりかえるべきところがない

灰によって充たされた室は

ぼくの帰りを待ってる

愛しみはたくさんものを焼き亡ぼしてったから

もう残ってるのはそれだけのもの

通りで事故が遭った

かれはかの女に会いにいかうとしてた

やがて音のない救急車がせめぎあい

通行人どものぶざまな顔や眼のうちで

くりかえされるかれのすべてはもうだれにも打ち明けられない

ヌード小屋の窓たち

ひとりの女の子がひよいと顔をあげ

なにが起ったかを覚る

ただしい灰だろうと

あやまちの灰だろうと

ぼくはすべての灰を聖なるものとして迎えた

たとえぼくに信じるものがなく

またただしきものたちによって追いつめられるなにかであろうともだ

やがて夜も濃くなって燈しどもがかれの運び去られた路上を照らすだろう

その止まったように止まらない光りのうち

初恋というなまへのついた地獄をだれかが拾い上げてしまう

ただいえるのはさようならということだけ



芝居

ついさっきの、

憶えたてのせりふ

凝っただけのいいまわし

犬どもの

拾い喰いによく似た

おれにとつての言語と発声

羞ずかしがるのもなかばを過ぎて

果てながら乗るバスの

見えない停留所たち

夜へとながくつづき

みえなくなっていく運行表がどこか懐かしい

子供の時分から

愛するということのために

憎むということのために

大きすぎる対価を払ってきた

おれはいまだっていいんだ
つぎはおまえたちの番だと

しかしとうに舞台は閉じられて

だれにも話せないということ

それらの傷みは枯れた葉や茎のようなもの

願いがここにある

叶えられてない祈りがここにある

どうかおれに役をくれ

拾いあつめたもろもろをぜんぶ解いてやる

そうだ

芝居をさせる

そしていますぐ

いますぐスポットライトをおれによこせばいいんだ



地域清掃

路上は充たされてた

たとえば首のないやつや

ギターのないギター弾きに

塵と埃

牡牛のように横たわって愛を求めるばかどもにとって

広告燈はでっかい天使だ

ひとびとを決して逃しはしない

逃してはくれないんだ

車をどこまで走らせようが追ってくるのがかれら

正常さによって狂わされたものたちの終の棲家たち

小さな函のなかで夜が熟み

女がどこかへ

男は取り残され

乾草でいっぱい

厩舎をおもいうかべる

求めてたものはどれも在りもしないものたち
さあ、眼をつむって
我慢なさい
痛くしないから
お姉さんが
棘を抜いてくれるわ、きつと。



壁

かの女が何回飛んだなんて

だれも知りはないんだ

けっきよくあのへんの空域がどうなつてようと

朝食のまずさには変わりないんだからね

ほんとうをいえば、きみのことは好きじゃないし

発動機みたいなからだもいやな感じがしてる

だってこっちは生まれたての如雨露なんだから

水なんかでやしないさ

きみが週にいくら飛んだってかの女にはなれやしないんだ

いくらでも何度でも壁にぶつかるというよ

きみがこなごなになるころにはあのまずい朝食とはおさらばだから

出会うことがいつだっていいとはかぎらない

それはだれでも知ってることだろ？

撲りつけられた子供たちが

やがてだれかを撲りつけるんだってさ

やっぱりおなじことの反復でしかないんだもの
空飛ぶサーカスのように愉快になんかなれやしない
どっかでねじまがつたものがいまになってだれかを蝕む
でもかの女は決してそうなりはしないんだ
壁をいつも飛び越えていつか
みんなのみえないところへ
飛んでいくからだ
ところで
バスの時間はいつ
それともここには来ない？



死んだ馬にまたがつて

かぜに

なふられ

路上

にすりきれ

立ちあがることも

できず

おもいだすのは舞台のうえのきみ

ほかの客たちは

きつと

ひやかしに

ちがいない

でも

ぼくはいつまでもいたかった

かぜは

きりきざむ

新聞記事を

なんでこうなってしまうのか
なにもわからずに

でもひとつ

ささやかな

夢を描いて

舞台のうえのきみを

ほかの客たちはからかった

きつと

ばかものに

ちがいない

ただ

ぼくはいのこりたかったんだ

できれば馬に

またがって

いますぐ馬に

またがって

町をぬけだそう

でもそれは死んで

走りそうにはない



埋葬

すでにためらうことはおろか

容赦もかなわない

枯れた花が欲しい

そいつを抱いて飛びこめる場所があればいい

すべてがおれを赦しても

自身ではそうにもできない

うごかしがたいものにかこまれ

すっかり鉤吊りにされてしまった

かつては走ることのできたのに

もいちど野苺や

けむりきのこ

廃屋や

探検にいきたかった

水のない貯水槽のうえをみんなしてのぼり

配電盤にかくれた蜂の巣に嚇かされたころ

かの女のことはまだ知らなかった
いくつもの柵をよじ登っては気分をたかぶらせたものだ
やがてカーヴにさしかかる
そのさきはどんなものだったろうか
廃ダムへのながい下り坂を降りて祠に手を合わせる
なにも祈ることなんかなかったけれど
このまえきみへ手紙を書いたよ
返事はなかったけれど
それがなによりだ
どうか忘れてくれよ
さよならだ
こちらをみてる世界よ
木立から光りはつづいて果てようとせず
やはりためらいはなくて
容赦はできない
自身を葬る
それこそが叶えられる祈りだ



飛ぶものを落とすとき

わたしははじめての羽を得るだろう

肉屋の女がふりあげるものがしつかりと筋を断つ

忘れたいものが忘れられず

憶えてたいものが薄れてしまう

わたしはただ飛ぶしかなかったんだ

あのとき

きみの手が石を掴んで

しつかとこちらをみてた

わたしはふるふると怯えて

でもだれもわたしを掴まえたりはしない

もうじき午前2時半になる

すべてのときはおそらくうちなる鳥だろう

一緒に飛ぶことがかなわなくともいい

あとはきみの投げる石を待つだけ

もうじきなにもかもが終わってしまうんだもの

また冬が来て

もしきみに便りを届けられるなら

なにもいない

なんだって

擲つ

知らない空域のうちに喪われていくわたしをごらん

きみにとってふさわしくなりたかった

ただそれだけだったんだ



火についての断章

ひとが人生を生きはじめるのは火がその手を触れたときからだ
熱さと傷みはなによりもの核そのもの

あのとときからぼくは自身を生きてる

たしかリチャード・ライトの自伝も火遊びからはじまってたっけ
平原のうえを

やぶけて空気のなくなったタイヤたちが燃える

燃やされて灰になるまでに

だれの自伝が

灰とけむりに失せてくだろう

ぼくはきょう時代遅れの火と出逢った

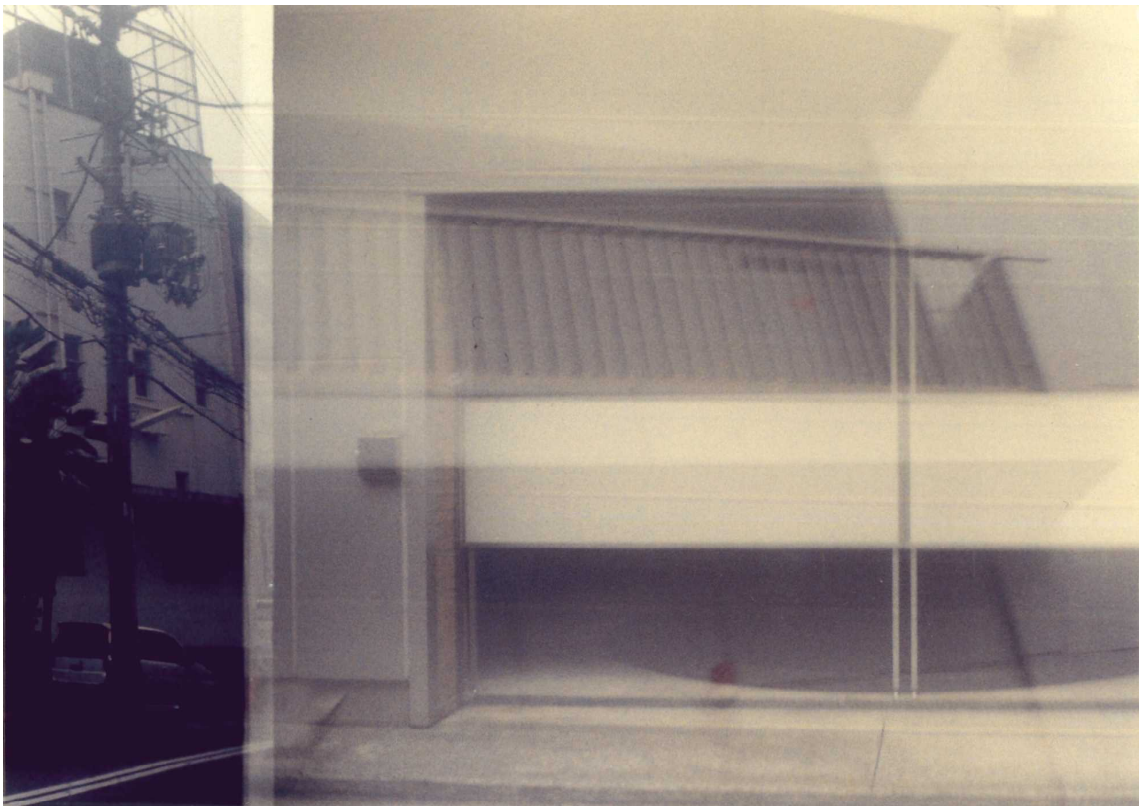
そいつは葎のそれだった

女の仕方でけむりは去っていき

指はいつまでも温かった

うち棄てられたもののために語れることがあるなら

まずまっさきに火について話そう
かつて愛しかったもののためにも
かつてすれちがったもののためにも



裏口

その戸口はだれも望まない
なにも待ってやしない

閉じて

閉じられてしあわせ

草も花もない鉢と

水でいっぱいペットボトル

通り過ぎるものはみなかつて生きたもののみ

そのなかにあってまだ生きてる

ウルフの歌声をおもいながら

遠のいてくその裏口へと

つながっていき

あまつさえなかへと招き入れるものはない

そんなものはオーダーメイドの美しい水死人だろう

扉にそつと唇ちをつけてみる

そんなときだった

草のようで花みたいなのが眼を瞬く
過古の亡霊だ

2月のはじめの朝

交わってるのは裏口とおれ

そして花のようで草みたいなのが

うちから戸を叩いて

懼れながらひらき

次へとつながっていく

あらゆる経験が洗い流され

生きるものとも死んだものともつかない手によって

次第にかき消され

もはや立ってるところも

まえとそっくりでも、おなじではない

そんなおれをあの子が笑ってる

いつまでも

いつまでも

ありがとうと

おれがいうまで



茎

かの女はまさに

たちのわるい茎をおもわせてやまない

12才からの17年と7ヶ月もの地獄篇

たしかに4月はむごたらしい月だった

13年もまえ、あれきり逢えなかったから

高原地帯へとつづく径でおもったものだ

きょうも逢えなかったと

どんな至福がこれより訪れようとも

ぼくは歌のように生き延びるつもりなんかない

わかってたまるものか

手心はなし

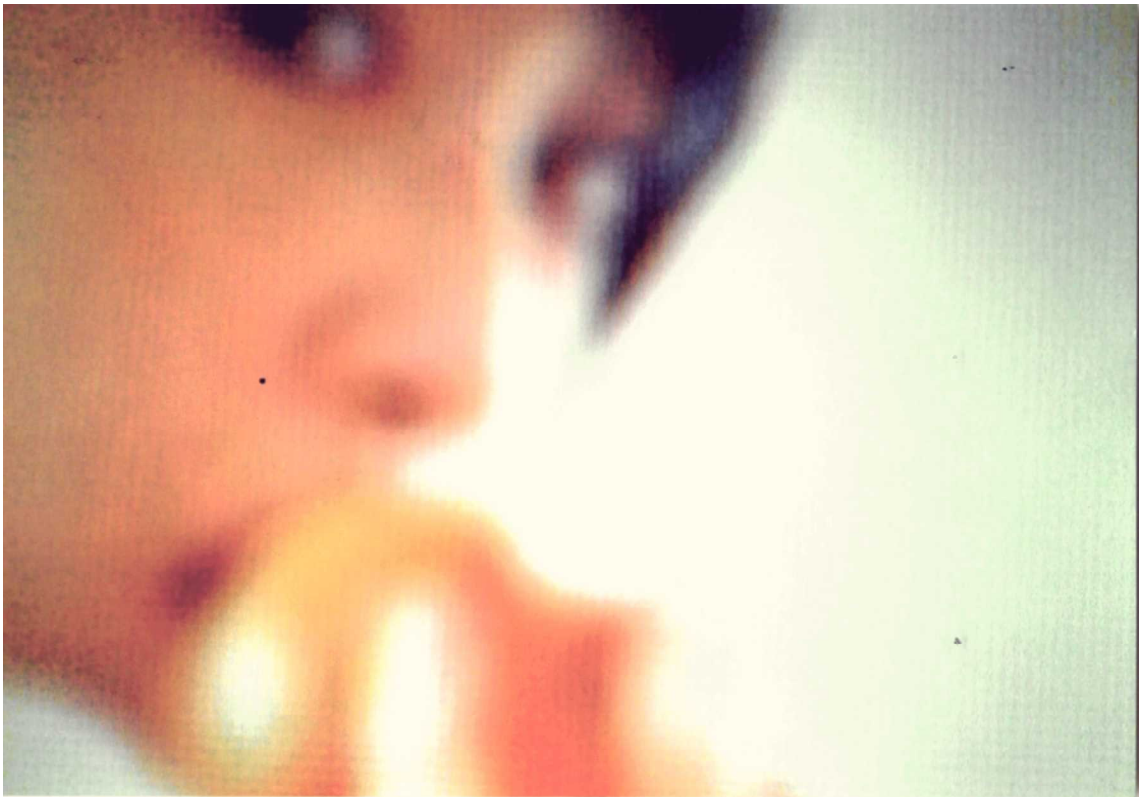
のたれ生きて

刻々と老いるなど赦しはしない

かの女の声を喪い、

広告のうちへさまようぼくよ、そのはらからよ

抜けそうにないんだ、この茎は
告げられるのは
さよならのみ
じゃあ



猫

あふなげなウオーホルの猫たちにかこまれて
眠りへと赴くきみの、

寝台

もう終わったんだ、悪夢を語るときは

いずれ果てるきみも猫も

夏のたそがれ

森へとつづく小径で

ふとおもったもの

秘密はいつまで秘密なのか

恋はいつまで恋なのかを

ガス・スタンドの燈しへとけむりをふきかけては考え

車道は猛スピードの猫でいっぱい

猛スピードの猫でいっぱい



清掃人

少なくとも

かつてあったものはそのかけを残してるだけだ
ものはみな失せ

手づくりの神殿のなかへと

そしてそいつは清掃車が運び去ってしまった

ありもしない裏通り

架空のカウンターで愛しいひとたちがいなくなっていく

それはまちがいなくみずから撰んだ札だった

急ぎ走りでとめることもできない速さをもって

おれは自身をおきざりにしたんだ

そいつのあまりの惨めさで

手に入れられるのは中古のやすらぎ

せいぜいのところオーブン席三十分のそれ

欲しいとおもったものはそれぞれ納屋の仕方で燃え

ゆっくりと遠ざかる景色

田舎の国道で

天使どもがはげしいおもづらでおれをどやしつけ

中古車センターだけが輝かしい

路上に擦り切れ

かぜになふられた

このおれが手にできるのはテニスの短篇ですらない

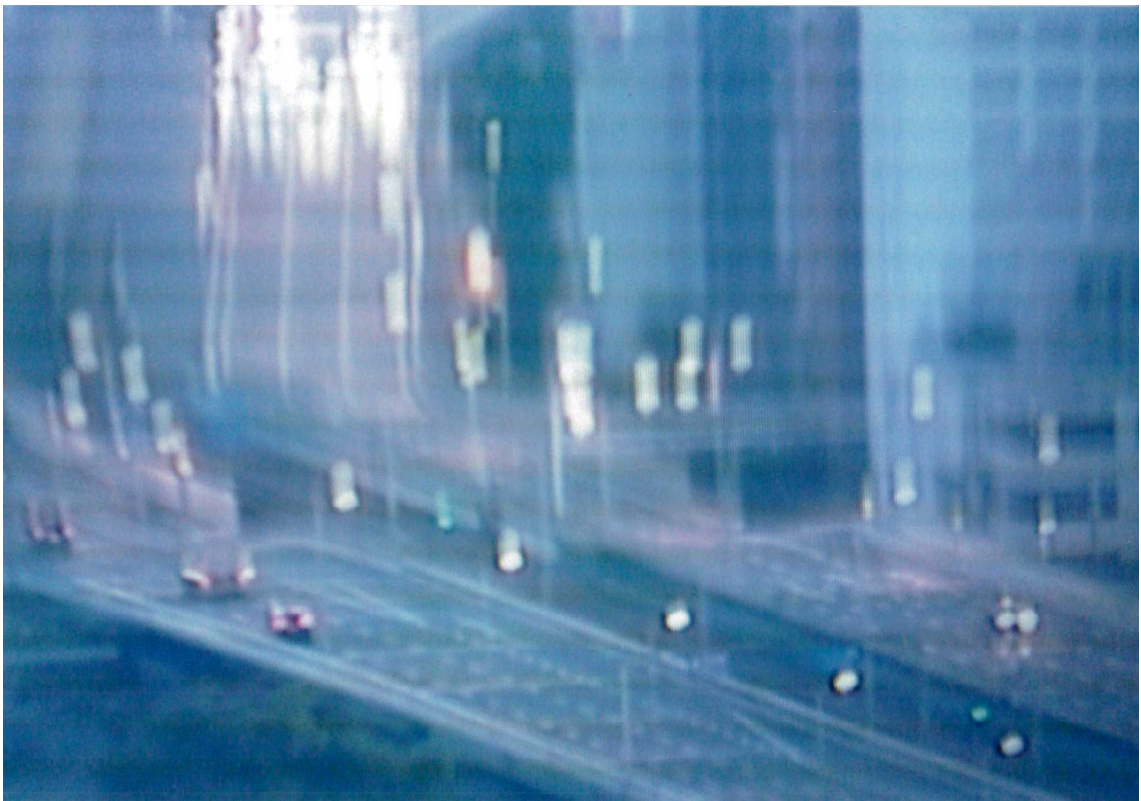
けっきょくは別離

自身を運び去っていく清掃人のような

ありかただけ



中田満帆 なかたみつほ／来歴Ⅱ '84年7月3日、兵庫県西脇市生。神戸市出身、在住。夜間高校卒業後、場所を転々としながら過ごす。日雇い派遣、飯場、浮浪者で喰いつなぐ。'11年、大阪の救貧院から神戸市中央区に移り棲み、創作物の販売を始める。絵、詩、小説、散文、写真、音楽など。詩集「終夜営業―Open 24 Hours―発送受付」「音楽集「open all night / formissing person」」。出版局「a missing person's press」主宰・発行人。



告げるよ、
——即興詩

あの子のゆうがたはいつもよごれていて
なんだかくさい

でもその臭いをかぐたんびにぼくはたかふってしまうのだ
どうしてなんだろう

きみのことなんかちっとも好きじゃないのにでも

ふるえる電柱たちのあいだをすりぬけるあの子のうしろ姿なんて
喪いながら手のなかにある生ぬるいものでできて

とっても気色わるいんだよ

でも丘にあがった自転車よりはましさ

きつといつしかきみのことが好きになって

けっこんするかも知れないな

水色の壁紙をはっていい絵を飾りたい

台所はいつだって整ってて

木でできたフオークがならんでるんだよ

それでもきみのことはちっとも好きじゃない

2013

遠くつづいている並木がぼくやあの子を笑い、

すぐに忘れてしまってもぼくはぜったいにこのゆうがたを忘れないだろう

あんなもんぜんぶ燃やしてしまえばいいって

胸にある熾き火が着てる世界を焦がしてしまった

もうどこにもいけやしないんだ

それでもかの女の、

ゆうがたの、

匂いだけはずっとそのまんま

うそだっていい、

告げるよ、

きみがなによりも大切だって

たとえばくの室からなにかがなくなってたとしても、だ。

これほど長いおもいわずらいの果て、
もはや帰ることはなく、
なにもものにも祈りはしない。

かつてだれかを待っていた、あるいは探していた、利用していた。
それらも過ぎ去って聴き手のない語りをここにおいておくよ。

a piece of paper in 38w / selected poems [second edition] by Mitzho Nakata

The Foreward and Selected by Tadaaki Mori

Copyright © 2014 by Mitzho Nakata, Tadaaki Mori

38w の紙片 中田満帆詩撰集 [second edition]

2021 年 4 月 22 日 改訂第 6 刷

著者／中田満帆、（序・撰）森 忠明

発行人／中田満帆

発行所／ a missing person's press

兵庫県神戸市中央区生田町 1-1-13 新神戸マンション 303 号

〒 651 - 0092

電話 = 078-200-6874

[MAIL] mitzho84@gmail.com

装丁／著者自装

ISBN978-4-9909502-0-0 C0092 P2000

Printed in Japan

